

20. 硯宮神社・二十三夜尊堂・愛友酒造

(1) 硯宮神社

硯宮神社の創建は不祥ですが、古くは今宮八幡社と称し応神天皇をお祀りして村社として栄えました。平安時代末期の治承年間（1160～1180年）佐竹氏を討つべく常陸国金砂山（現常陸太田市）に向かう途中、頼朝軍は（頼朝公が居たかは定かではありません。）辻の今宮八幡社に立ち寄り鹿島神宮に参拝する際の戦勝祈願文をしたためました。その際に使用した硯を当社に奉納したと伝えられています。

江戸時代に入り水戸藩2代藩主徳川光圀公がこの故事を聞き、硯を見て「これは中華の産するところの馬蹄石と言い珍重すべき物」と言われ、ご神体として祀るよう命じ、社号を硯宮神社に改めさせたといわれています。

現在の社殿は昭和54年（1979年）の火災で焼失後、昭和56年（1981年）に再建されたもので、拝殿は入母屋、銅板葺、平入、桁間3間、正面1間向拝付。本殿は一間社流造、銅板葺。例祭は毎年7月下旬の土日曜日、御神輿渡御と山車曳き廻しが奉納されます。祭神は応神天皇と硯です。



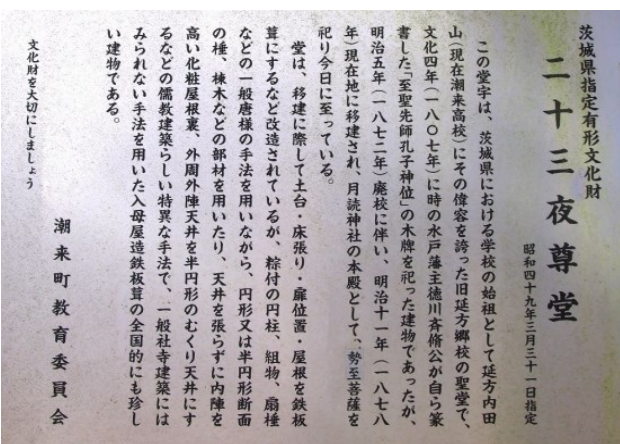
(2) 二十三夜尊堂

二十三夜尊堂は江戸時代後期の文化年間（1804～1817年）に延方郷校の聖堂（孔子廟）として建てられました。

延方郷校は、この地方の南郡奉行小宮山楓軒の尽力により設立され、元加賀藩士沢田平格の他に久保木幡竜、宮本茶村なども教鞭をとり儒学の他に医術、武術などを教え多くの人材を育成しました。文政2年（1819年）には8代藩主斉脩公直筆の「至聖先師孔子神位」の木碑が安置されました。その後、明治5年（1872年）に廃校となり、聖堂は明治11年（1878年）に現在地に移築され二十三夜尊堂として改修されました。学問の神様孔子を祀るこの聖堂は、光圀公が招いた儒者、朱舜水が制作した模型を元に作られたといわれています。朱舜水は水戸藩に聖堂を建てることを夢見ていましたが叶わず、その模型により後世に建てられたのは、湯島聖堂と延方聖堂だけでした。湯島聖堂は震災、空襲で焼失してしまいましたので、移築後修復されていますがこの聖堂だけが貴重な教育遺産として残っています。屋根には孔子廟には必ずある鬼ぎん頭という神獣が乗っています。

二十三夜尊堂の建物は、入母屋、銅板葺、桁行3間、梁間2間、平入、寺院建築でありながら随所に当時の郷校建築の要素が見られる独特な建物で、明治初期の御堂建築の遺構として貴重なことから昭和49年（1974年）に茨城県指定有形文化財に指定されました。

月読神社としての創建は貞享2年（1685年）、月読命の分霊を勧請したのが始まりとされ、古くから神仏習合し月読命の本地である勢至菩薩が同時に信仰されました。勢至菩薩は二十三夜講の本尊でもあり、周辺住民の講中の拠点として信仰され、特に月読命は女神で勢至菩薩は女性的な印象が強いことから安産、子育て、子授かりに御利益があるとして女性から支持されました。



(3)愛友酒造

江戸時代から「粧友（こうとも）」の屋号で親しまれた粧屋で文化元年（1804年）の創業です。「愛友」は友を愛し相睦み肝胆相照らすという意味が込められ、社是は「四海皆兄弟」です。水は「大生神社」の湧水と同じ水脈の井戸水を使い、米は潮来産米です。全国新酒鑑評会金賞受賞蔵で酒造見学は年中無休です。

